上演 11

2023 年 8 月 1 日 1 校目

近畿　ブロック（兵庫県）

滝川第二高等学校

「リセマ達」

第４７回全国高等学校総合文化祭演劇部門

第６９回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会　担当委員

神奈川県立横浜平沼高等学校（神奈川県）

河村　有里乃

この作品は、クラスのイベントが成功するまで何者かが意図的に日常を繰り返してしていることに主人公の紗月と優太が気づき、何回も日常がリセットされる現象「リセマラ」に抗っていく物語だ。「青春は 1 度きりだから」とカホがクラスメイトに呼びかけるシーンは、人生 1 度きりだからこそ価値あるものなんだと感じた。私もなにか嫌なことがあると未来に行きたい、過去に行きたいということをよく考えてしまう。しかし、今を大切にしないと未来は訪れないし、その過去があったからこそ今の私がいると考えると、やり直せなくて良かったなと思う。

また、「やり直せないから、人生意味があると思います！」と紗月が言うシーンは、失敗は悪いことじゃないと感じさせてくれた。実体験の中にも、定期テストなどでわからない問題があり、適当に回答して合っていたものは覚えていないが、間違えたものは逆に覚えていているということが多々ある。『失敗は成功のもと』と、よく言うが本当にそのとおりだと感じた。

そして、吉本先生が、自分が考える良いクラスを実現するために何度もリセマラを繰り返していた事が分かった時、理想の押しつけを感じたと同時にそれはアプリゲームでの『リセマラ』という行為自体にも言えることだと思った。自分の理想を押し付けると相手はとても苦しく感じる。だからこそ、アプリゲームでもリセマラをせず一つのデータを愛することは、人生と重なり合うと考えた。

何気なく使われる『親ガチャ』『担任ガチャ』といった単語は、無意識に周りの人を商品扱いしているように感じドキッとした。失敗をすると『やり直したい』という感情が生まれがちだ。特に『リセマラ』という行為はそれが顕著に出ている。しかし、一度しか無い人生だからこそ、失敗を恐れず前に進み続けること、キャラの育成のように他の人と時間をかけて向き合っていくことの大切さを感じさせてくれる作品だった。